

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION

特定非営利活動法人 子ども NPO センター福岡

〒810-0005

福岡県福岡市中央区清川1丁目11-9 ステイツ天神南 202号室

TEL : 050-1743-5971 FAX : 050-3512-4545

E-mail : info@npoccf.jp

2021 年度 Children's Rights Share Project 子どもの権利シェアプロジェクト 報告書





もくじ

はじめに	1
子どもたちをめぐる課題	2
Children's Rights Share Project について		
Children's Rights Share Project の活動内容		
	4
プロジェクトが目指す未来	6
初年度目標と中長期計画	8
2021 年度の取り組み		
公開シンポジウム	12
子どもアドボカシー出前講座	16
インフルエンサー養成講座	26
プログラムデザイン事業	32
初年度の振り返りと今後の展望	34

はじめに

子どもの権利を社会教育の一環として位置づけ、子どもと日常的に関わりのある人から、関わりのない人まで、子どもや子育てについての現状理解が進むこと。

児童福祉施設や里親家庭において独立アドボカイトの受入れへの理解が広がり、社会システムの中で無理のない形で、独立アドボカシー・アドボカイトが機能していくこと。家庭や学校、地域社会において子どもアドボカシーを理解し、実践を支える土壌が育まれていくこと。

このようなことを目的として本プロジェクトを遂行してきました。

プロジェクトを実施する過程で、子育て中の方や地域の方々、子ども関連の NPO 団体職員の方、行政関係者、そして児童福祉施設職員の方や、教職員等の教育関連従事者など、さまざまな方と出会い、子どもアドボカシーの考えを伝え、相互理解に努めてきました。

私たちの住む日本では、子どもや若者が孤立によっていのちを失っています。自らのからだを傷つけながらもがいています。彼らの中にある「孤立感」は見た目では分かりません。彼らの小さな SOS を無視してきたツケなのかもしれません。彼らは、大人好きな「いい子」を演じさせて安心してほしい大人のわがままに付き合ってくれているのかもしれませんが。令和に育つ子どもたちは、なかなか表面に SOS のサインを出そうとしません。

このプロジェクトの本質は、私たち大人もまた、弱みを見せられないつながらの中で暮らしているかもしれない、と気づくところから始まるのではないかと考えています。

この活動を通して、アドボカシーの理念が浸透し、自然なかたちで大人の行動変容が生じていくことを願っています。

子ども NPO センター福岡について

子ども NPO センター福岡は、子どもの支援をしている NPO や個人の活動をつなぎ、お互いの活動を認め合い、協力して活動を進めるためのプラットフォームを目指しています。また、そこから生まれる新しい価値を社会に提言していく組織です。

ユニセフが提唱する「子どもにやさしいまち」を目指して、子どもたちが権利を使いやすい環境づくりや、大人たちが権利の使い方を伝えられるよう、サポートしていきたいと考えています。

子どもたちをめぐる課題

子どもの権利が放置されてきた 25 年間

日本が「子どもの権利条約」を批准して 25 年あまり。しかし、子どもの権利を守る重要性ははまだ大人たちに浸透しておらず、子どもたちは自分の人権を守る方法さえ知らされていません。さらに、この四半世紀で少子化が進み、18 歳未満の児童が 1 人以上いる世帯の割合は平成元年の 41.6% から、令和元年には 21.7%* にまで減少。子どもの存在を日々身近に感じる大人が少なくなったことで、ますます子どもの権利に関心が集まらない社会になりつつあります。

*2019 年 厚生労働省『国民生活基礎調査』より



社会に反映されない子どもたちの声

子どもの権利を重んじて、その声を社会に反映させる仕組みが整わないことは、国のありかたにも影響を及ぼしています。現在、子どものためのさまざまな政策が議論されていますが、それらは時として大人の都合の独りよがりな内容になってしまっており、子どもが使いやすいものにはなっていません。同じような施策が、バラバラの表現や手法で実施されているケースもあります。また、子どもの意見表明を促す活動が活性化されていないため、子どもを取り巻く諸課題（いじめ・不登校・虐待・子ども若者の自殺等）の予防・発見・対応が非効率になっています。

求められるのは体系化された解決プログラム

一方で、子どもたちへの支援は、「愛情」「善意」「母性」といった、曖昧な解決に頼る傾向にあり、一部の犠牲的労力を前提としたものに集約されがちです。子どもを取り巻く問題が複雑化する現代社会において、対応する大人たちが希求しているのは、論理的で体系化されたアプローチでしょう。

子育てや子どもに関わる仕事をしている大人たちの不安を解消し、子どもとの信頼関係を深める方法を伝えたいと願ってスタートしたのが「Children's Rights Share Project」です。講義、参加者同士のディスカッション、ロールプレイなどを通して、体系的にノウハウが習得できるようにプログラムを組んでいます。

本プロジェクトが目指しているのは、子どもたちが「何でも話していいんだ」と思える大人をたくさん増やすこと。多くの大人が子どもたちの声に耳を傾け、その意見を社会に反映していけば、子どもたちが安心して暮らせる日本へと成長できるはずだからです。



Children's Rights Share Project の活動内容

大人が子どもの権利行使を支援できるように、さまざまな取り組みを行っています。特に、子どもの意見表明権を尊重し、それが「子どもたちの権利である」との認識が大人の側に広まることを意図して活動をしています。

1

広報啓発事業

【実施内容】

- ◎ 市民フォーラム内 公開シンポジウム
- ◎ 子どもアドボカシー出前講座

市民に広く発信できる公開シンポジウムを通して、「子どもの意見表明」のための取り組みを司法・教育・福祉のそれぞれの分野から報告し、共通化への試みとトータルな議論を深めます。

子どもアドボカシー出前講座では、子どもの養育現場で生じるさまざまな疑問や不安にお応えし、独立アドボカシーを受け入れる素地を作ることを目標に、各種プログラムを実施します。



3

プログラムデザイン事業

この事業で使用するプログラムは、概念を伝えるだけでなく、受講する側の認知に働きかけ、具体的なスキルや行動変容に結びついていくものである必要があります。年間 700 件の暴力防止プログラムを提供する経験豊富な他の NPO や研究者、市民とも協力しながら、構造化されたプログラムの開発を行います。

2

人材養成事業

【実施内容】

- ◎ 人材養成チーム会議
- ◎ フォーマルアドボカシー養成講座
- ◎ 子どもの権利とアドボカシーのインフルエンサー養成講座
- ◎ ピアアドボカシーファシリテーター養成講座

子どもアドボカシーの4つのジグソー（ピア・インフォーマル・フォーマル・独立）の各ピースが機能するよう働きかけるプログラムを、施設・学校・保護者に向けて実施。また、子ども同士の互いに理解しあう力を有効に使い、信頼を独立アドボカシーへ引き継ぐための「ピアアドボカシー・ファシリテーター」養成プログラムに取り組みます。

さらに、それぞれのアドボカシーをトータルにコーディネートするなど、全体の連携を図れるような人材を育てる「人材養成チーム会議」を立ち上げます。



プロジェクトが目指す未来

「子どもの権利」についてあまり知らない方々に対して、権利を身近に感じていただけるように知識や実践方法を伝えていきます。さらに、本プロジェクトに共感して仲間に加わってくださる方々と力を合わせて、アドボカシーの理念とともに行動していきます。

学校・学童保育 児童養護施設 児童相談所へ

公的な場で子どもたちを支援する人々に向けて、「子どもの権利」活用のための講座を定期的実施できるような制度・人材・教材を全国に整えていきます。

保護者・里親 子育て支援者へ

「子どもの権利」という言葉になじみが薄く、不安を感じる大人のためにアドボカシーの意義を分かりやすく伝え、共感を広められる人材を育成。子どもの意見表明権を活用したほうが、育児や子育て支援のストレスが軽減されるという新しい視点をもたらしていきます。

地域の さまざまな 大人たちへ

地域の大人たちが「子どもの権利」を理解し、子どもの意見表明権の活用が重要であるという共通認識がもてるような環境づくりに努めます。これにより、さまざまな子ども支援と市民活動が効果的に協働できる下地を作っていきます。

子どもたちへ

子どもが集団で過ごすあらゆる場所で、発達に応じた権利教育を展開。特に、子ども同士でも互いの権利を支え合うことが可能で、そうしたアクションがみんなの幸せにつながることを、分かりやすく伝えていきます。

社会へ

上記のような各活動に携わる人材を育成し、社会への発信力を高めることで市民の対話を活性化させ、こども基本法の制定や、こども家庭庁の設置が実効性の伴うものになるよう働きかけていきます。

子どもにやさしいまちを作るために

「子どもの権利」を子どもたちが安全に使えるようにするには、大人側の文化を育てていくことが重要です。そこで私たちは各種講座等を開いて次のようなアドボカシーを社会に根づかせ、子どもにやさしいまちづくりを促進していきます。

フォーマル・アドボカシー

学校や学童、そして児童養護施設など子どもの集団に関わる現場では、子どもの意見表明権を活用することで、関わりが効果的・効率的になることを、それぞれの現場で分かりやすくプレゼンテーションできる人材を養成します。

インフォーマル・アドボカシー

家庭や地域では、「子どもの権利」という言葉になんとなく不安な感じがする人も多いでしょう。「子どもの言う通りにしないといけないの?」「子どもがわがままになるんじゃないか…」など。子どもの意見表明権を活用することは、長期的に見ると、子育てや子育て支援が楽になったり、子どもを叱るストレスがなくなる等のメリットが多いのです。それらのことを分かりやすく、周囲の人たちに伝えられる人材を養成します。

ピア・アドボカシー

権利教育、特に子ども同士でも権利行使を助け合う力があり、それは大人による関わりより効果的であることも多いものです。発達に応じた手法で、さまざまな子どもたちに権利を使う方法を提供できる人材を養成します。

独立アドボカシー

上記の3つとは異なる、利害関係のない独立した立場からアドボカシーを専門的に実践する支援提供者を養成します。福岡では、この部分を2021年に新たに設立された「子どもアドボカシーセンター福岡」が担います。



1

Children's Rights Share 広報啓発事業

◎ 公開シンポジウム

12月に実施予定。参加者目標人数は200名。開催後にアンケートを実施し、司法・教育・福祉のそれぞれの分野からの参加とフィードバックを得る。

◎ 子どもアドボカシー出前講座

年間20回、延べ200名が参加。講座後はアンケートを実施し、独立アドボケイトの導入に積極的な回答が7割以上となることを目指す。



2

Children's Rights Share 人材養成事業

◎ 人材養成チーム会議 [メンバー5人 / 年間10回実施]

◎ フォーマルアドボカシー養成講座 [90分×4コマ×2日 / 参加者20名]

◎ インフォーマルアドボカシー養成講座 [90分×4コマ×2日 / 参加者20名]

◎ ピアアドボカシーファシリテータ養成講座 [90分×4コマ×2日 / 参加者20名]

◎ 独立アドボケイト養成基礎講座 [90分×4コマ×3日 / 参加者20名]

上記講座の実施を通して、子どもの意見表明権を支える人材が養成され、その受け皿となる場所が、教育や福祉の現場および地域などに3か所以上確保されることを目指す。

3

Children's Rights Share プログラムデザイン事業

プログラム作成委員会を、年間5回開催。プログラム実施後のアンケートをもとに、適宜フィードバックの場を設けてブラッシュアップを行う。講座の内容は、動画として記録・編集し、DVD等で頒布可能にするほか、事業の実施プロセスを含めたプロジェクトの概要を経過報告としてまとめる。

効果測定と開示

さらに、事業全体を通して各プロセスの当事者である子どもたちが、「子どもの権利」「意見表明権」などについて学ぶ機会を得られているか、その参加率を測定。子どもたちの日常に権利がどう反映されているのかについても調査を行い、開示する。

Children's Rights Share Project 10 年計画

	広報啓発事業	人材養成事業	プログラムデザイン事業
目標	大人たちが「子どもの権利」の大切さを理解できるように語りかけていく。また、子どもには意見を表明する権利があり、それが社会に良い循環をもたらすことを伝えていく。	<p>保護者や里親や子育て支援の人々に向けた「子どもの権利」活用学習の機会を身近なものにし、これを全国に広め、安心して子育てできるように整えていく。</p> <p>学校や児童福祉施設などで子どもを支援する人々に向けて「子どもの権利」活用講座が定期的実施されるよう制度・教材・人材を整え、全国に広めていく。</p>	社会全体にアドボカシーの考え方が浸透するよう、その概念と手法を紹介するコンテンツを制作。大人たちの行動変容を促し、アドボカシーを軸にした地域連携が進むことを目指す。
2021 年度	<p>子どもアドボカシー出前講座</p> <p>公開シンポジウム</p>	<p>人材養成チーム会議</p> <p>ピアアドボカシーファシリテーター養成講座</p> <p>インフォーマルアドボカシー養成講座</p> <p>フォーマルアドボカシー養成講座</p> <p>子どもアドボカシーセンター福岡設立</p> <p>独立アドボケイト養成基礎講座</p>	<p>独立アドボケイト役割紹介動画</p> <p>事業理念・活動内容紹介動画</p>
2022 年度			<p>受講者参加型動画</p>
2023 年度			
2025 年度			
2030 年度			

子どもたちが「意見表明権」をはじめ、さまざまな権利活用について学び、かつ子どもたち同士が互いに権利を支えあえるよう、制度・人材・教材を整え、全国に広めていく。

地域に「子どもの権利条約」が当たり前のものとして定着することを目指す



2021 年度の取り組み

公開シンポジウム

概要

◎日時：2021年12月12日（日）10:00～12:00
 ◎開催形式：オンライン（Zoom ウェビナー）
 ◎タイトル：
 子どもの権利シェアプロジェクト
 『マイノリティになった子どもたち ～子ども像のリアル～』

ファシリテーター：重永 侑紀氏（NPO 法人にじいろ CAP 代表）
 シンポジスト：圓入 智仁氏（中村学園大学 教育学部 准教授）
 木下 夕紀氏（学び舎しおらぼ主宰）
 牛島 恭子氏（子ども NPO センター福岡 事務局長）

広報

実行委員会とデザイナーが協働し、本シンポジウムも含めて、市民フォーラム全体のイメージに沿うリーフレットを作成。
 行政機関・公民館・児童福祉施設などを中心に、福岡県内で約 3,000 枚を配布しました。



配布したリーフレットの表紙

参加者

◎参加人数：61名
 ＊参加者属性
 行政関係者、教育関係者、児童福祉施設職員、NPO 団体職員、学生、育児中の保護者など

シンポジウム詳細

異なるバックグラウンドを持つシンポジスト 3 名が登壇し、それぞれの視点からの発表が展開されました。

はじめに、自身も現在育児中である牛島氏による問題提起からスタート。育児中の保護者が抱える現実的な苦勞や心の葛藤、社会から受けるプレッシャーなどについての話が切り出され、地域や各種コミュニティが果たす支援のありかたについて提案がなされました。
 次に木下氏が、地域の要望を受けて自ら主宰する共有スペース「しおらぼ」を具体例として紹介。地域社会において安全・安心な子どもの居場所を提供することの重要性や、日々の充実感、経済面での困難さとそれを克服していくまでの経緯など、運営を通して得られたさまざまな気づきが表示されました。
 さらに圓入氏からは、社会教育の研究者としての立場から、子どもの健やかな育ちを支えるために地域環境やコミュニティをどう整え、周囲の大人たちはどのような配慮を心がけると良いのかなどの提案がなされました。

この後、大西良氏（子ども NPO センター福岡理事）が過去に収録した動画にて、子どもを取り巻く現状を表す各種データが表示され、シンポジスト 3 名で「子どもの意見表明権」に関するディスカッションがなされました。

最後に、ファシリテーターの重永氏が「マイノリティとなった子どもの存在を社会全体で受け止めていく」という決意を述べ、シンポジウムは締めくくられました。



「公開シンポジウム」から（内容を一部抜粋）

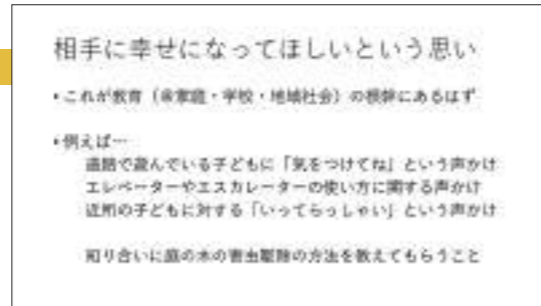
ファシリテーター	シンポジスト			
 重永 侑紀氏 NPO 法人 にじいろ CAP 代表	 圓入 智仁氏 中村学園大学 教育学部 准教授	 木下 夕紀氏 学び舎しおらぼ 主宰	 牛島 恭子氏 NPO 法人 子ども NPO センター福岡 事務局長	

子ども NPO センター福岡 事務局長／牛島氏から
 育児に従事するときの葛藤、行動変容を促す地域の
 再定義などの話題提供がなされました。



学び舎しおらぼ／木下氏から
 子どもを中心とした民間のコミュニティスペースに
 ついて、運営をしていく上での苦労と、
 地域における存在意義について示されました。

中村学園大学／圓入氏から
 社会教育の概念や、教育の根幹にある
 「相手に幸せになってほしい」という思い、
 さらに現代社会の余裕のなさが及ぼす
 影響について示されました。



子ども NPO センター福岡 理事／大西氏から
 子どもの現状についてデータが提示され、
 子どもの QOL と権利（意見表明）の実現との
 相関について示唆されました。

公開シンポジウム ～受講者の声～



地域に子どもの居場所をつくって、そこを運営されているお話が素晴らしかったです。資金難や社会状況などによる難しさがありながらも、何とか解決して、運営が続けられていることを知って勇気づけられました。



ファシリテーターの方の話が、私のモヤモヤをスッキリしてくれました。子どもへ「ことば」をプレゼントできるようになりたいな、と思いました。



シンポジストの方の活動に賛同いたします。近いうちにお訪ねしてお話しをお聞きしてみたいなあ～と思います。現場の方の声が一番ですね。ガンバってください！



親という立場から子育ての難しさについて話されたことに共感しました。社会が変化し、それに伴って人々の生活も変化しているにもかかわらず、子育てに関しては親（特に母親）に全責任があると信じられているようにプレッシャーを感じています。大人は自分の子どもだけに限定せず、誰もが子ども全体を支えていこうというような、集合意識と行動の変容が必要だと感じました。




社会教育の専門家の方の話が興味深かったです。社会の中の教育の役割について自分なりに考えてみたいと思います。

子どもアドボカシー出前講座

目標

アドボカシーについての疑問や不安に答え、参加者の実践につながるような方法を提案する。

概要

◎ 開催実績：全 19 回

2021 年 8 月 25 日、9 月 23 日・25 日、
10 月 13 日・23 日、11 月 18 日・19 日・21 日、
12 月 7 日・13 日・19 日、
2022 年 1 月 7 日・11 日・18 日・21 日
2 月 11 日・19 日・20 日、3 月 12 日

◎ 開催形式：対面またはオンライン

◎ 受講料：各回 15,000 円（税込）+ 交通費

◎ 時間：90 分前後

◎ 最少催行人数：各回 3 人

広報

日常的に子どもと関わるさまざまな属性の方に
関心をもっていただけるよう、親しみやすく分
かりやすい表現トーンのフライヤーを作成。
福岡県内で約 600 枚を配布し、幅広い対象者
に呼びかけました。

参加者

◎ 2021 年度参加者合計：529 名

* 参加者属性

里親会、放課後児童クラブ、放課後デイ
サービス、地域自治会、フリースクール
児童相談所、児童養護施設、教育委員会
など



配布したフライヤーの表紙

事業詳細

子どもの声を聴く重要性を理解してはいるものの、何から始めればよいのか悩んでいる
方々のために、現場に伺って講座を行っています。子どもの権利や子どもを取り巻く現状
について情報を提供するほか、子どもへの声かけや話の聞き方などスモールステップですぐ
に行動できるアドボカシーの実践方法などもレクチャー。さまざまな属性の方に権利尊重
の有用性を分かりやすく伝えています。

2021 年度は、対面講座 12 回、オンライン講座 7 回の計 19 回を実施しました。アウトリーチ
型で講座を実施することにより、新しい団体とのつながりもできました。

子どもアドボカシーは特別なことではなく、日々の暮らしや仕事の中でできること。実践を
重ねることにより、子どもとの信頼関係を深めていくことができます。

「子どもの声を聴いたら、その通りにしないといけないのか？」

「話を聴いていると、感情的になってしまうことがある。どうしたらいい？」

「子どもの言うことを聴くと、わがままになるのではないか？」

「大人のアドボカシーは、どうすればいいの？」

本講座では、このような大人の疑問に答えています。



子どもアドボカシー出前講座 ～受講者の声～



子どもたちに権利がある。そう理解はしていても実際に子どもたちと関わる時には、いつのまにか大人のペースになってしまっていたり、逆に権利を尊重しようと思うあまり自分がなんとかしなきゃと思いつぎたり、日頃の自分を振り返り、改めて権利について考えることができました。子どもたちが自分の権利をうまく使えるようにする。すごく大切で必要だと思い、これからも考えていきたいです。

放課後に子どもたちを預かる者としては「ただいま」から始まる子どもたちの止まらないお喋りに毎日幸せを感じさせてもらっていますが、「インフルエンサー」としての役割を担うとなると、伝える力が圧倒的に足りない自覚があります。周囲のスタッフや保護者の皆さんに受け止めてもらえる言葉選びやタイミングを、講習等で学びながら自己研鑽していきたいと思います。



特別養子縁組のご家庭でも勉強になる内容だったと思います。運営する「おむすび会」*の里親同士、子ども達同士、また里親と子どもとの交流を行う中で、インフォーマルアドボケイトやピアアドボケイトへと自然と繋がっていけるなと感じました。

*福岡市里親会・養子縁組部会「おむすび会」

これまで自身が子ども達にしていた何気ない言動も子どもにとってはアドボカシーとなるものだったのかなと思えて、改めて仕事に対するモチベーションが上がりました！



小さな自己選択・自己決定の練習を夫婦でやっていこうと思います。アドボカシーさえ初めて聞く内容で4種類もあることを知り詳しく勉強したいと思いました。インフォーマルアドボケイトが身近にいることは親としても心強いですし、私も近所の子どもにとってインフォーマルアドボケイトになりたいと思いました。



伝え方が攻撃的であれば、ハッキリNOと伝えて良い。でもこちらは怒鳴ったり嫌いになったりしないから安心してと伝えることが大切ということを教えていただき、今後の子どもとの向き合い方がとても明確になりました。

分かりやすく、即実践できそうな内容でした。これから新一年生受け入れで、忙しくなりますが、子ども達の声に耳を傾けることを怠らず、また、保護者と子ども間でしっかりアドボケイトとして頑張りたいと思いました。ありがとうございました。



子どもアドボカシー出前講座 ～主催者の声～



アドボカシーの考え方はこれからも必要になると
思います。養子縁組では真実告知や出自について
養親が対応していきますが、当事者の子どもが養
親に対して遠慮があったり、我慢して発信できな
いことがあるかもしれません。その際にアドボケ
イトへ話すことによって気持ちが前向きになるの
ではないかと思います。いつでも子どもの話がで
きる場をお願いしたいと思います。

すぐに使いたい「ことばかけ」の仕方が分かり、
職員にとっては「子ども観の裏づけ」ができ
たと感じます。子どもに接する人たちには必
ず受けてもらいたい講座だと思います。福岡
市内で1万人以上の子ども達と毎日接してい
る支援員に必ず受けてもらえるよう、市が主
導する必須研修になったら…と願ってます。



講師の優しい話し方が体の中にスッと入ってきて、子どもの権利
について職員と共有できました。実践的な声かけの仕方も、同じ
グループの職員とロールプレイをする中で、職員が（子どもにこ
う言わなきゃいけない）と義務的に思っていることをすごく感じ
ました。子どもの権利を守るこ
との正しい理解が深まっていく
よう、今後も職員みんなで学び
を深めることができればと思い
ました。



話を聴くたびに新しい気づきを引き出してくださるので、毎回
新鮮な気持ちで受講させていただいております。特に最後にあっ
た「でも忙しい」という題名のスライドは、施設職員にとっては、
とても重要なスライドではないかと感じました。子どもの発信
を受け止めることは、より関係性が深まったり、「子どもから大
人への見え方が変わっていくことになる」と
いう点に気付けば、子どもの声や想いを聴く
ことにもっと積極的になっていけるのではない
でしょうか。私自身も、日ごろの業務を通
して、そう感じる部分がありましたので、大
変共感いたしました。



子どもへの声掛けの方法など具体的な
例を示してお話しいただき、参考にな
りました。子どもを主体に支援する
という大事な根幹に改めて気付かされる
良い講座ですね。研修に参加された方
のアンケートでも、とても多くの好意
的な意見が見られました。



アドボカシーに関する知識だけでなく「なぜ
必要なのか」という点について、初任者から
ベテラン職員まで幅広い年代に分かりやすく
説明していただけて、大変満足できました。
また、グループ内での話し合いの時間などが
あったため、新任の職員も積極的に参加する
ことができおり、真剣に、楽しみながら学
べる環境を提供していただけたと思います。



【レポート】子どもアドボカシー出前講座を受講して

みんなのこどもプロジェクト 後藤エミ

「自由に話していい」と言われて、あなたは話せますか？

「何でも話していいよ」と促され、「さあ、どうぞ！」と相手が目を輝かせている…そうした状況では、大人の私たちだって、胸の奥にしまいこまれた思いを言葉にできはしないでしょう。小さな子どもなら、それはなおさらです。もやもやとしてカタチのない思いを言語化することは、とても難しいもの。しかも、大人対子どもでは、どうしても力関係が生じてしまい、子どもは言いたいことが言えないのではないのでしょうか。どんなに優しく接しても、子どもにとって、やはり大人は強者だからです。

そんなときこそ、アドボカシーの手順を踏む必要がでてきます。アドボカシーとは、その人が当たり前前に意見を言えるように、しくみを整えていくこと。相手が幼い子どもなら、横に寄りそってお話を聞く。子どもが口をつぐんでモジモジしていたら、たとえ話を交えたり、ときには人形を使ったりして少しずつ心の声が出せるようにしてみる、などです。

子どもたちが安心して思いを表出できるように、大人たちはどんな心構えをもてばいいのか？今回受講した「子どもアドボカシー出前講座」では、そうした学びを多く得ることができました。

子どもの権利を重んじたら、言うことを聞かない子になるの？

現在は、まだ多くの大人が「子どもに権利なんて、まだ早い」「意見を聞いてばかりいたら、子どもが言うことを聞かなくなる」と考えています。でも、このように大人が思ってしまうのは、大人自身が自分の人権の大切さを理解できていないから。私たち大人が子どもだった頃、学校では「人権」「権利」について学習しています。しかし、その内容は、著しく人権侵害を受けた人々についての勉強でした。つまり「私にも権利があり、それを行使できる」とは学んでおらず、自分を守る思考法や具体的な対応策を身につけていないのです。

「権利」は英語で表記すると“Right”。車でバックするときに言う“All right”と同じで「それでいいよ」という意味です。この「それでいいよ」という精神は、全ての人に必要なもの。

大人だって、ことあるごとに「ダメだ」と言われ続けたら、生きているのがつらくなるはず。時には「キミは、キミのままがいい」と言ってもらいたい。その感覚は、子どもも同じです。

そして、この権利は「Aさんには権利があるけど、Bさんには権利がない」といった差別があってはいけないのです。欠点があるから、貧しいから、外国人だから、障害があるから、LGBTQ だからなど「〇〇〇〇だから」という理由でその子の生きる権利を軽んじたり奪ったりしてはいけません。

日本では「みんなちがって、みんないい」という金子みすゞの言葉が何かと多用されますが、残念ながら子どもに対しては、そういう対応をしていない気がします。私自身も、一人の大人としてこの状況を見つめなおしてみると「ああ、いけない…」と思います。

子どもが意志を表明し、自らの人権を守ること、そして子どもの「生きる」という思いを、周りの大人がサポートすることは、当然のことなんだと気づかされます。

言えなかった思いは、やがてトゲになる。

親や教師、周囲の大人たちから「自分の思いは遠慮なく言葉にして構わない」と言われず育った子どもは、心の中に満たされない何かを抱えたまま、そのイライラを何らかの形で表面化させます。暴力をふるう。誰かをいじめる。やけを起こす。自己否定をする。死にたい気持ちになる。無気力になる。心のトゲは一人ひとり違う形で現れるけれど、自分の外に向かって、または内に向かって必ず刺さっていくのです。

こんな不幸を避けるために、大人が心がけたいこと。それは、子どもたちが日々感じている思いを、ちょっとずつ話せるような環境をつくることなのだそう。とくに養育者の力は大きく、その信頼が子どもの心の安定につながるのだとか。「どんな悩みも話せる」と子どもが感じられれば、心の中のモヤモヤは、たまることなく消えていくようです。

大人に心配をかけたくないから、何も言えない。

ひとつ気をつけなければならないのが、子ども自身の「身近な大人に心配をかけたくない」という思いかもしれません。子どもは、大人から社会について学んでいく中で「こんな話は人に言っちゃいけない」と思い込んだり「こんなことをした自分は良くない人間だ」と自己嫌悪に陥ってしまうことがあります。最悪の場合、犯罪に巻き込まれても「自分に非があったのだ」と己を責める子どもだっています。やがて「自分で解決するまでは、誰にも相談できない」と思い詰めて、心の扉を閉ざしてしまうこともあるのです。

日本では、こうした子どもたちが多い傾向にあり、子どもの幸福度が先進国の中で下から2番目とされている理由も、ここにあるとのこと。日頃から子どもの話にじっくりと耳を傾け「あなたは、あなたのままでいい」と全面的に肯定していれば、子どもは自責の念にさいなまれることなく心穏やかに過ごせるのでしょうか。

なぜ、子どもの自殺が増えているのか。

日本では、子どもの自殺は増加の一途です。しかも、前触れを見せて自殺する子どもは少なく、その多くが突発的だといえます。学校も先生も友人も、そして親さえも「この子は大丈夫」と思っていたのに、突然、生命を絶たれてしまう。だから、いま多くの大人たちはどう対処すればいいのか分からない、と戸惑っているのです。

悲しい結末を迎えてしまう子どもの多くは、基本的自尊感情の脆弱さがあるのではないかとされています。基本的自尊感情とは「私は生きる価値のある人間だ」「いつか、うまくいく」と根拠なく思えること。この感情は、身近な大人からの無条件の愛によって育まれるものだそうです。しかし、日本の子どもたちは大人から自分をまるごと肯定される経験が少なく、愛を肌で感じ取れていないために基本的自尊感情が培われていないようなのです。



子どもだけではなく、大人にも足りていない自尊感情。

基本的自尊感情が欠けていると「努力しなければ、誰からも必要とされず、生きる価値がない」と考えるようになります。そして、勉強でよい成績が出せなかったり、外見に悩んだり、人間関係で失敗したりすると、ある時ふと自殺を企図してしまうのです。これは、子ども時代だけでなく、大人になっても続く傾向かもしれません。

人間は、瞬発的な強いストレスは乗り越えられるものの、真綿で首を絞めるように続くストレスには弱いのだそうです。そうやって自分でも気づかぬうちに、突然ポキッと折れてしまう。ただ、基本的自尊感情があり、心がどっしり安定していれば継続的ストレスにも耐えられるとされています。その安定感を育むのが、何でも遠慮なく話せる環境。自分の失敗や欠点も安心して言える場があれば、心が軽くなる。大人だって、そんな環境が約束されていれば、たぶん死ぬほど悩んだりしないでしょう。子どもであれば、特にそう。だから、子どもには話を聞いてもらう権利があるのです。

子どもの意見を聴こうとして、がんばりすぎない。

大人はつい「子どもを良いほうへ導いてあげたい」と願うもの。子どものお手本になれるよう完璧を目指してしまう人もいます。でも大人も常に成長中なので、そもそも完璧なんて無理ではないでしょうか。今回、アドボカシーについてお話しされた講師も「完璧を目指そうとはしないで」とおっしゃっていました。講座では子どもの話を聴くときの心の持ちかたについて具体的な方法をいくつか学んだので、ここにまとめてみたいと思います。

いちばん有効な声かけは「あらら、そうなの」。

子どもが、親の腕や脚にからみついてきたり、黙ってちょこんと横にいたりするときは、話したいことがあるサイン。こうしたときは、ゆったりした態度で子どもが口を開くのを待ってあげたいのだとか。そのとき気をつけたいのが、次のようなことだそうです。

◆子どもの感覚を否定しない◆

ケガしているように見えないのに「痛い」と言ったり、たいして出血していないのに「血が出ている」と子どもが涙ぐんでいるとき、それを否定しないこと。本人が、痛いと言うのなら、痛い。血が出ていると言うのなら、出血していると受け止めることが大切です。「構ってもらおうとして、大げさに言ったりウソをついたりしたらダメ」なんて言わないでください。子どもは「痛い」をきっかけに話したいだけなのです。

◆大人はテンションを抑える◆

子どもがどんなに大きな声で「つらい」「いやだ」と言っても、大人は淡々と聞いてください。そうやって子どものテンションを調整していくことで、子どもの気持ちは徐々に静まり、やがて自分が伝えなかった本当の気持ちを表に出せるようになっていきます。子どもが荒ぶっているときに有効な声掛けは「あらら、そうなの」といったものです。



◆子どもの話に白黒つけない◆

たとえば子ども同士のケンカが起きたとします。それぞれに言い分があるでしょうし、両者に一理ある場合もあれば、話のズレを感じることもあるでしょう。でも、それぞれの話を聴いた上で、大人がするのは「あなたの側から見たらそうなのね」と言うこと。片方の肩を持つたりせず、否定もしないことです。仕事のように、子どもの話を整理して合理的解決を図る必要はありません。だって、子どもは自分の言い分を認めてほしいだけなのですから。「人間関係においては、白黒つけない方がいい時もある」という態度でいて、ちっとも構いません。

◆思春期はカラダから発する言葉がある◆

思春期になると、子どもは内にたまったイライラを言語化することなく、全身で表現することがあります。そういったときは「なんだか、すごくイライラしているね」と声をかけてみてください。たいていの子は「イライラなんてしてない!!」と、またイライラして応えると思いますが「私には、そう見えたんだよね。何か手伝えることはある?」と声をかけてみると良いかもしれません。体内にあふれたアドレナリンを解放し、クールダウンできるよう場を整えることも、時には必要です。

◆子どもの「勉強したくない」は聞き流す◆

大人にしろうじて聞こえるくらいの小さな声で「あーあ、勉強したくないなあ」と、子どもがつぶやくことがあるかもしれません。でもそれは「やっぱり勉強しなきゃいけないよね…」という思いの表れ。自分で乗り越えなきゃいけない、子ども本人の問題です。大人が踏み込んで解決する必要はなく、自分で解消できるまで待ちましょう。どうしても気になって声をかけるとしたら「勉強したくないよね」「勉強って、めんどくさいよね」と声をかけるくらいでちょうどいいです。間違っても「つべこべ言わない!勉強はやらなきゃダメでしょう?」といった具合に、子どもの声をつぶさないでください。

互いを受け入れあうことで、大人も子どもも強くなる。

話を聴いてもらうとき、そこに否定の言葉がなければ、子どもは「私は、まるごと受け入れてもらえている」と実感でき、「そのような無条件の愛を得ている自分には存在価値がある」と自信をつけることができるでしょう。子どもアドボカシーのゴールは、そこにあるのかもしれない私は思いました。

見据えるゴールさえ間違っていなければ、子どもとのやりとりは「ちょっとくらい失敗することもあるさ」といった気分で、おおらかに構えていいのではないのでしょうか。「子どもの意見をマジメに聴くぞ」と力む必要はなく、ニュートラルでいいのだと感じました。

子どもがあるがままでいいように、大人もあるがままでいいのだと思います。そして、大人が子どもを、子どもが大人を、まるごと受け入れあう。こんなに否定のない人間関係を築きあえたら、なんと素晴らしいことだろうと思います。子どもたちの話を聴いていった先に救われるのは、大人かもしれない。私は講座を受けて、そう感じました。

インフルエンサー養成講座

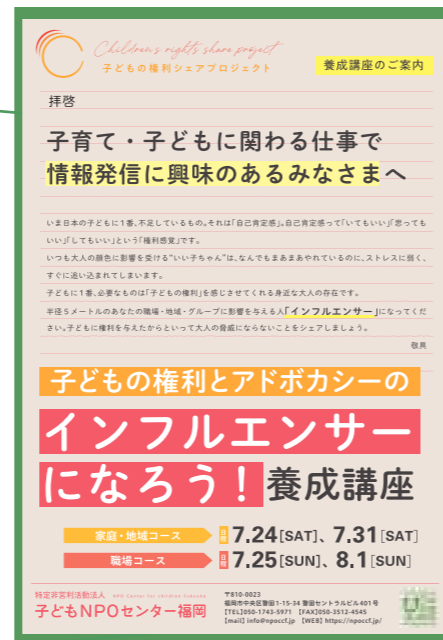
職場や地域に「子どもの権利」の大切さを伝え、共感者を増やして、インフルエンサーになっていただくための講座。アドボカシーの概念などを講義形式でお話して理解を深めるとともに参加者が楽しみながら学べる実践型ワークショップを行いました。

概要

- ◎ 開催実績
 - 家庭・地域コース：2021年7月24日、7月31日
 - 職場コース：2021年7月25日、8月1日
- ◎ 開催形式：① オンライン形式 ② オンデマンド ③ 対面形式
- ◎ 受講料：各コース 15,000 円（税込）
- ◎ 定員：各コース 20 名

広報

子どもの権利とアドボカシーについて受け入れ基盤を作りたい方々のためのプログラムであるため、講座内容が体系的なものであることが分かるようアカデミックな雰囲気でのフライヤーに。
行政の子育て関連担当課、児童福祉施設、児童相談所などを中心に、福岡県内で約 600 枚を配布しました。



配布したフライヤーの表紙

参加者

- ◎ 2021 年度参加者合計：42 名
- * 参加者属性
 - 行政関係者、児童福祉施設職員、NPO 団体職員、教職員、主任児童員、議員など

「インフルエンサー養成講座」から（講座内容を一部抜粋）

なぜインフルエンサー養成講座を開始？

現代社会の構造に力の不均衡がある

インフルエンサーとして前向きな情報発信を意図的に行うには次の3つが必要

正確で安心できる 知識	誰もが取り組める 選択肢	ミスも共有できる つながり
----------------	-----------------	------------------

子どもアドボカシーインフルエンサーの必要性と、日常の中で実践していくために必要な状況について提示します。

子どもが間違ったことをしたときには心を鬼にして叱る必要もある？

多くの大人が経験したことがありそうな状況を例示し、それがアドボカシーの視点に立った時にどのように捉えられるかを問題提起します。

意外だったものは、どれ？

講座の中では、何度か参加者同士で意見を出し合う機会を設けています。その話し合いの中で、互いの意見の違いを認め合うとともに、同じ領域に興味を持つ仲間としての繋がりが高められるよう促していきます。

4種類のアドボカシー

- ピアアドボカシー
- インフォーマルアドボカシー
- 独立アドボカシー
- フォーマルアドボカシー

現在のアドボカシーの基本的な考え方について説明。4種類のアドボカシーが互いにどのように作用し、機能するかを示していきます。

アドボカシーの仕組み

子どもたち

- セルフピア
- 独立
- フォーマル&インフォーマル
- インフルエンサー
- 市民

独立した権限をもつ

アドボカシーが機能するためには、広範な人々の間に「子どもの権利」についての認識が必要であり、権利意識の土壌があって「子どものセルフアドボカシー」が成り立つことを説明します。

権利と義務は対立するもの？

子どもの権利を大人は保障する義務がある

権利

義務

大人は子どもに対して「生きているだけで権利がある」「話したいことを話し、聞きたいことを聞いてよい」と伝えていくことが重要である、と解説。

情動

感情

意向

意見

emotion

feeling

view

opinion

子どもから発信される内容を大まかに分けると、情動・感情・意向・意見などがあります。それらの形成・表明を支えるのは周囲の大人の役目だと説いていきます。

インフルエンサー養成講座／職場コース ～受講者の声～

「支援は支配になりやすい」という言葉にドキッとしました。私がこれまで良かれと思ってしてきた子育てや仕事、地域での活動が、もしかしたら支配的になっていたのではと、振り返りの時間になりました。そして、子どもにまつわる神話がどれだけ根拠のない不安感を与えてしまうのか。自分自身もいろんな神話に振り回されての子育てだったかもしれないですね。子どもたちのことをもっと信じて、おしゃべりを楽しみ、子どもたちを自由にすることに自信を持てる大人に。神話を壊すことで子どもの権利や話を聞く勇気を持ちたい！そんなインフルエンサーを目指すぞ。



日常の保育現場の中で保育が作業として、流れていることが多いのではないかと振り返ることができ、大変有意義だったと思います。子どもの声を拾い、丁寧に聞き、子どもの「嫌」という気持ちに寄り添い、日常をサポートしていきたいと改めて感じました。



地域子育て支援拠点で毎日親子に接しています。ここまで内容の濃い研修を準備していただき感謝します。系統立てて子どもの人権・アドボカシーについて学びました。受動的に聴くばかりでなく、グループワークもあり、参加者の皆さんの意見にも気付かされることがたくさんでした。ビデオの学習も何回も見られるところがいいですね。これから、子どもの意見を聞き、子どもの権利を伝える役割を果たしていきたいと思っています。



どのレベルのインフルエンサーを養成したいのかが明確になったので、イメージができました。欲張るのではなく、身の周りに影響を与えることで、市民の力が向上するというメッセージが、こちらも気負わずに、肩肘張らずに、素直に吸収できそうだと思います。子どもの「権利」と聞いてもゾワゾワとしない若い世代に「うん、うん、分かる！」と思ってもらえる福岡を作りたいと思います。



インフルエンサーって？というところから始まりましたが、自分の周りを耕していくことなのだと分かりました。さまざまな神話がある中で、がんじがらめになっている保護者や、声を聞かれにくい子ども達や、職業として子どもに関わる人々、皆がアドボカシーによって楽になるのではという可能性も感じました。自身が子育て中であることもあり、日常の中で権利を感じさせることを意識したいと思いました。同時に、支援は支配に繋がりがやすいこと。教育は目的でなく手法であることなど、ドキッとしたワードを常に心に留めておきたいです。



ロールプレイは苦手でしたが、実践が一番学べると感じました。「支援と支配」のお話は、本当に心に刺さりました。また、自分を見つめることの大切さも学びました。子育て支援の仕事柄、親子への対応が多く、どうしても親への支援が中心となって子どもが置き去りにされてきたように思います。そのことに気付いていてもなかなか改善できない現状に対して、私も声をあげていかなければいけないと気付かされましたし、そのための仲間を増やしていこうと思いました。



インフルエンサー養成講座 / 家庭・地域コース ～受講者の声～



これまで子どもとの関わりでモヤモヤしていたことが、今回の講座で「共感なんだ！」と胸にすんと落ちてスッキリしました。生後4ヶ月の子どもを育てていて、泣きかたや表情から意思が伝わってきて、かわいさと面白みを感じています。子どもの感情に対する共感を重ねていきたいと思っています。

インフルエンサーとして半径5メートルの人に押しつけでなく、前向きに発信して影響をもたらすことの大切さが分かりました。子育てに関しても科学的根拠に基づいてそのことを伝えていく、広めていくことを実践していきたいと思っています。ジェンダーの話題とは切り離すということも頭に入れておきたいと思っています。全ての子どもたちの権利や人権について伝えていきたいと思っています。



全く知識がない状態で参加しましたが、この活動の基本的な理念をよく理解することができました。自分も子どもや、その周囲の大人にアドボカシーについて話せるようになっていきたいと思いました。



インフルエンサーに必要なもの、正しい知識・正しいスキル・そして哲学！看護学生の頃に学んだ、頭と手と心と同じ！人との関わりでは、共通しているのだと思いました。そして、熱いハートと高いコミュニケーション能力、誰にも屈しない強い心。もっともっと正しい知識を身につけ、高いコミュニケーション能力で実践していくためには、私自身のさらなる進化が必要と思いました。



オンライン、ビデオ、対面と経験し、対面の大事さと必要性をあらためて実感しました。今、コロナ禍でのオンライン授業を経験している子ども達も同じように感じているのではないかと思います。対話では相手を感じ、傾聴する姿勢を大切にしていきたいと思いました。子どもにまつわる神話とその背景を知ることによってインフルエンサーとしてできることから始めていきたいと思えました。



対面で皆の前で発表したとき、無意識のうちに、自分の意見の方へ相手を取り込むような会話の仕方をしていました。そういう側面を自分が持っていることに客観的に気付けたのも今回の講座に参加して良かった点でした。今後は、インフルエンサーとして、今回の講座で得た知識と手法を半径5メートルの人に伝え、影響を与えられるように、そしていずれはより多くの人たちにアドボカシーや子どもの権利について発信し、子どもたちがのびのびと成長できる社会をつくることに寄与していきたいです。



プログラムデザイン事業

アドボカシーの概念と手法について知ることができるコンテンツを開発し、福岡県内外で子どもに携わる活動を行っている団体や、子どもアドボカシーに興味を持っている方に共有を図る事業です。対面講座を実施できない遠方の方々にも、私たちが手掛ける子どもアドボカシー関連活動を広めていくことを目的としています。

子どもたちを取り巻く あらゆる大人にアドボカシーを広めたい

いま全国では社会的養護のもとで暮らす子どもたちのための「独立アドボケイト」養成講座が開かれています。しかし、アドボカシーが必要なシーンは施設内だけではありません。子どもは、学校の先生や地域の大人たち、子ども同士の関係性の中で育っていきます。つまり、あらゆる場面でアドボカシーが求められているのです。子どもを取り巻くコミュニティの文化に変化をもたらしたいと考える私たちは、「子どもの権利」「アドボカシー」を誰もがスムーズに理解できるようなコンテンツの制作に着手しました。

このような方々への知の共有を目指しています



分かりやすく活用しやすい動画コンテンツを制作

2022年度以降の本格的な配信・運用に備えて、複数の動画コンテンツ制作に着手しました。子どもNPOセンター福岡がこれまでに行ってきた事業を、拡散しやすく理解促進につながりやすい映像にまとめています。

独立アドボケイトの役割を紹介

「独立アドボケイトってどんなことをするの?」という疑問にお答えするために、分かりやすい事例をあげながら紹介する動画を制作しました。

福岡市は、全国に先駆けて2021年度から児童福祉施設への独立アドボケイトの派遣をスタートさせています。しかし、具体的な支援内容については、まだ一般の理解が進んでいません。そこで本動画では典型的事例を基にしたストーリーを、イラストレーションで端的にお伝えしています。

独立アドボケイトの専門性をうまく機能させるには、一般の大人たちが日常の中で行うアドボカシーとの連携が不可欠です。さまざまな場面でアドボカシーが実践される社会であれば、子どもは自らアドボケイトにSOSを発信しやすくなるのではないのでしょうか。「独立アドボケイト」への理解が進むことで、地域の大人一人ひとりにできることが浮かび上がってくる、そんな動画に仕上げました。



事業理念と活動内容の紹介

Children's Rights Share Projectの理念と、それを推進する子どもNPOセンター福岡の活動について紹介する、約2分のショートムービーを制作しました。動画では「子どもの権利を尊重するって、どういうこと?」という疑問に対して一つの方法を提案し、大人たちが協力しあうことの大切さを呼びかけています。ご覧になった方々が日常の中でアドボカシーを実践していきたくるよう、また子どもNPOセンター福岡が取り組む事業に親しみを感じていただけるように、やさしい表現でメッセージしています。

受講者参加型ムービーの制作（計画策定中）

「子どもアドボカシー出前講座」のムービー制作を行います。単なる講座の記録映像ではなく、好奇心を喚起して、能動的な学びを誘発できるような資料やナレーションを検討。キャストは、本事業の人材養成事業の一つである「フォーマル/インフォーマルアドボカシーインフルエンサー養成講座」を受講・修了した方々の中から希望者を募り、トレーニングを経てご出演いただきます。鑑賞後、「あ、そういうことか!」と子どもの権利とアドボカシーについてすんなり理解でき、誰かに話したくなるような作品に仕上げしていきます。

初年度の振り返りと今後の展望

子どもがマイノリティになった社会で、大人に気づいてほしいこと。

2021年4月から2022年3月にかけて、私たちは日本財団の助成を受けて「Children's Rights Share Project（子どもの権利シェアプロジェクト）」に取り組み、シンポジウムなどの広報活動や各種講座を展開しました。福岡県内外の18団体、629名（シンポジウム57名、各種講座572名）の皆さまにご参加いただき、みなさまより、「あ！そうか」、「仕事の参考になった」、「今までは分かっているつもりだった」、「もっと勉強して知っていききたい」などの反響を得ました。

私たちが行っていることは、地味で長い時間を要する活動です。でも、継続していかなければならない、とても大切な活動です。

18歳未満の児童（子ども）が1人以上いる世帯の割合は、平成元年には41.6%だったのに対して、令和元年には21.7%（厚生労働省／2019年『国民生活基礎調査』）でした。現在は5世帯のうち1世帯にしか子どもがいないということになります。これを人口比にすると、総人口に占める子どもの割合はわずか11.7%と推計されています（総務省統計局／2022年統計トピックス No.131 我が国のこどもの数-「こどもの日」にちなんで-「人口推計」）。つまり、日本で暮らす大人世帯の5軒に4軒はリアルな子どもと生活環境が遠く離れており、子どもたちは社会の中で、マイノリティとして生きています。

“権利”を、水や酸素と同じくらい当たり前のものに。

こういった社会的な背景の中で、本プロジェクトでは、子どもの声を聴き、それぞれの子どもの人生の主人公として主体的にものごとを選択していくことの必要性を伝えてきました。これは誰もが持つ当然の権利ですが、今の日本では、大人も子どもも、体系的な権利教育を受ける機会が少なく、自分が権利を有していることを自覚・行使している人はどのくらいいるのでしょうか。そのため“子どもの権利”と聞くと、何か難しいもののように感じます。また、「権利のためには、まず義務を果たさなければ」「子どもが権利を正しく使えるのか？」といった不安や恐れを感じる方もいらっしゃるかもしれません。よく使われる比喩を借りると、権利とは“水や酸素のようなもの”であり、「Right（してもいいこと）」です。さらに「人が生きていくのにないと困る権利」を人権とし、人類の知恵として使いこなしてきたものです。しかし、子どもになると大人たちはつい制限をかけたくなるようです。

本プロジェクトでは、そんな「当たり前のこと」や「不安感」を整理するチャンスを作ります。私たちは、一人ひとりの子ども固有のものがたりに耳を傾け、彼らと一緒に多様性をもった未来を作っていきたくと思っています。そして、もし、皆さまのなかに、このアイデアに賛同してくださる方がいらっしゃいましたら一緒にしませんか？とお誘いをしているのです。

子どもと大人が、等身大の自分でいられる、やさしい日常へ。

子どもと大人は互いにたくさんのことを学びあうことができます。子どもの目に大人の姿がどう映るものなのか、子どもの耳には大人の言葉がどう聞こえるものなのかなど、大人にドキッとするような気づきを与えてくれます。人間である以上、大人も完璧ではありません。失敗したり、迷ったり、何が正しいか分からなくなったりします。しかし、時々大人はそれを忘れて、子どもに対して絶対的なルールを示す権威者として振舞ってしまうことがあります。そんな時は、飾らない仲間と喋りあい、振り返り、未熟な部分を子どもと共に笑い合えたら、等身大の子どもや自分を愛おしく感じられるのではないのでしょうか。立派な人になろうとせずに、“まあまあ、そこそこ、だいたい”の自分でよしとして、まずは子どもと一緒に日常の生活を楽しんでみましょう。

みんなで力を合わせて、子どもにやさしいまちへ、一歩ずつ。

本プロジェクトはまだ始まったばかりです。これからもっと共に活動する仲間を募り、志を共にする方々とネットワークを築き、お互いが持つ多様なバックグラウンドに敬意を払いながら全体として同じ方向へ進んでいきたいと考えています。継続して行っていく各種講座や広報活動などと併せて、人権や本プロジェクトに触れるためのイベントや、本プロジェクトの理念について学びたい方へのコンテンツの提供など、新たな活動も遂行していきます。

さらに本プロジェクトは、理念と手法を分かりやすい形で皆さまにお伝えするために、「Children's Rights Share Project（子どもの権利シェアプロジェクト）」から「コドモのがたりプロジェクト」に名称が変わります。この名称では、それぞれの子どものものがたりに耳を澄まし、大切な個性と人権を守っていくという意図を平易な言葉で示しました。いままで以上に広範な方々に思いが届き、社会がゆっくりと心地よい場所になっていくよう、一歩一歩、着実に、活動を続けてまいります。



子どもの声が導いてくれるのは、
きっと、誰もが見たかった未来です。

